

第十二講 徒然草

次の文章を読んで後の設問に答えよ。

丹波に出雲といふ所あり。大社おほやしろを移して、めでたく造れり。志田なにかしの某

とかや(1)しる所なれば、秋のころ、聖海上人しやうかい、そのほかも、人あまた誘ひ

て、「いざ給へ、出雲(2)拜みに。かいもちひ召させん」とて、具しもて行き

たるに、おのおの拜みて、ゆゆしく信起おまへこしたり。御前ごまへなる獅子・狛犬こまいぬ、背

きて、後ろさまに立ちたりければ、上人いみじく感じて、「あなめでたや。5

この獅子の立ちやう、いと珍し。深きゆゑあらん」と涙ぐみて、「いかに殿

ばら、殊勝(3)のことは、御覽じとがめずや。無下いなり」といへば、おのお

のあやしみて、「まことに他にことなりけり」「都みやこのつとに語らん(1)」など

いふに、上人(4)なほゆかしがりて、おとなしく物知りぬ(2)べき顔したる神官

を呼びて、「この御社の獅子の立てられやう、定めて習ひあることに侍らん。10

ちと承らばや」といはれければ、「そのこと(3)に候ふ。さがなき童べどもの

つかまつりける。奇怪(5)に候ふことなり」とて、さし寄りて、すゑなほし

てい(4)にければ、上人の感涙いたづら(5)になり(6)にけり。

問一 二重傍線を付した部分イ〜ニを、それぞれ五字以内で現代語訳せよ。

ニ	ハ	ロ	イ

問二 傍線(1)の部分の解釈として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 よく知っている所なので
- 2 領有している所なので
- 3 愚かな人のいる所なので
- 4 面倒をみている所ならば
- 5 霊験あらたかな所なので

問三 傍線(2)の部分について、この言葉を発したのは誰か。左記各項の中から最も適当なもの一つを選び、番号で答えよ。

- 1 志田の某
- 2 聖海上人
- 3 志田の某の友人たち
- 4 神官

問四 傍線(3)の部分の解釈として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 この素晴らしいことが、なぜお目に止まらないのですか。
- 2 この素晴らしいものに、なぜ欠点があるか御覧になってわからないのですか。
- 3 素晴らしいものに対しては、御覧になっただけで欠点をいうべきではない。
- 4 おとなしくしていましたから、お目にも止まらなかったのでしょうか。
- 5 この謙虚な態度が、なぜ御覧になってわからないのですか。

第十三講

随筆

作者が心に浮かんだ事、見たり聞いたりした事など思いのままを筆にまかせて書いた文章

【平安】

枕草子 清少納言 1000 日本最初の随筆文学。約三百段。

清原元輔の女むすめをかしの文学。中宮定子（関白藤原道隆の娘・一条天皇の后）に仕えた。

三種類に分類する。

①類集段「物尽し」
「は」型
（山は・川は・鳥は etc.）
「もの」型
（うつくしきもの・すさまじきもの etc.）

②随想段 作者の感じることを書いてある段
（春はあけぼの… etc.）

③回想段「日記」（宮にはじめて参りたるころ… etc.）

【鎌倉】

方丈記 鴨長明 1212
（初期）

和漢混交文。仏教的無常観（作者が目にした大火・大風・福原遷都・飢饉・大地震などこの世の無常のさまを写實的に描いている）。厭世観。対句・比喩が多い。

徒然草 吉田（卜部）兼好
（末期）

1331

自然観・人生観。

主題↓具体例↓結論

結論↓具体例

具体例↓結論

※鴨長明と吉田兼好は時代は二人とも鎌倉時代でジャンルも同じだが二人は会ってはいない。

【江戸】

折たく柴の記

駿台雑話

玉勝間

花月草紙

琴後集

新井白石

室鳩巢

本居宣長

松平定信

村田春海

重要

鴨長明といたら

「方丈記」 (随筆)

「発心集」 (説話)

「無名抄」 (歌論)

めづ 【愛づ・賞づ】 (動)

- ① 感心する・賞賛する
- ② 愛する・かわいがる
- ③ ほめる



めでたし(形)

- ① すばらしい
- ② すぐれている
- ③ 立派である
- ④ 美しい

なにがし
それがし

- ① だれそれ・某
- ② 私(一人称)

〈省略〉

とぞ
となむ
とや
とか
とかや

（言ふ）の省略
まれに（聞く）の省略

とこそ — （言へ）の省略

まれに（聞け）の省略

にや

にか

（あらむ）↓（デアルダロウカ）
デアロウカ

にこそ

（あれ）↓（デアル）
（あらめ）↓（デアルダロウ）
デアロウ

しる【知る・領る】

- ① 治める
- ② 領有する
- ③ 整理する

僧正・僧都・阿闍梨・上人・聖人・聖
↓ 偉いお坊さん

あまた
こちら
そこら

たくさん

いざたまへ【いざ給へ】

さあいらっしやい

いさ——打消（サア？）

いさ知らず

いざ——願望・意志（サア！）

いざ行かむ

〈尊敬〉

飲む・食ふ・着る・乗る・す

たてまつる【奉る】

まゐる【参る】

めす【召す】

ぐす【具す】

①連れていく・持っていく

②伴う

③そろう

ゆゆし【忌忌し】

- ① 不吉である・縁起が悪い
- ② すばらしい
- ③ 程度を表すⅡいみじ

ゆる【故】

- ① 原因・理由・事情
- ② 趣・風情・由緒
- ③ (接助的) くによって・くので

むげなり【無下なり】

- ① まったくひどい
- ② 身分が低い

cf. むげに【無下に】

- ① むやみやたらに
- ② ひどく
- ③ まったく

おとなし【大人し】

- ① 大人びている
- ② 思慮分別がある
- ③ おもだっている

つべし
ぬべし
つらむ
ぬらむ

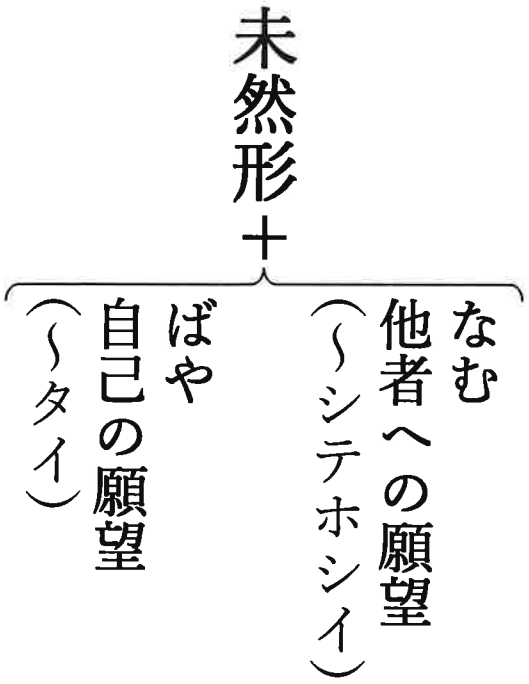
の「つ・ぬ」は完了（強意）

無生物（生きていないもの）が主語になった時の「る・らる」は原則として受身にならない。

大仏殿（建てられ）ける時に
尊

大仏殿が建てられた ×
大仏殿をお建てになった ○

さだめて——推量
きつとくだろう



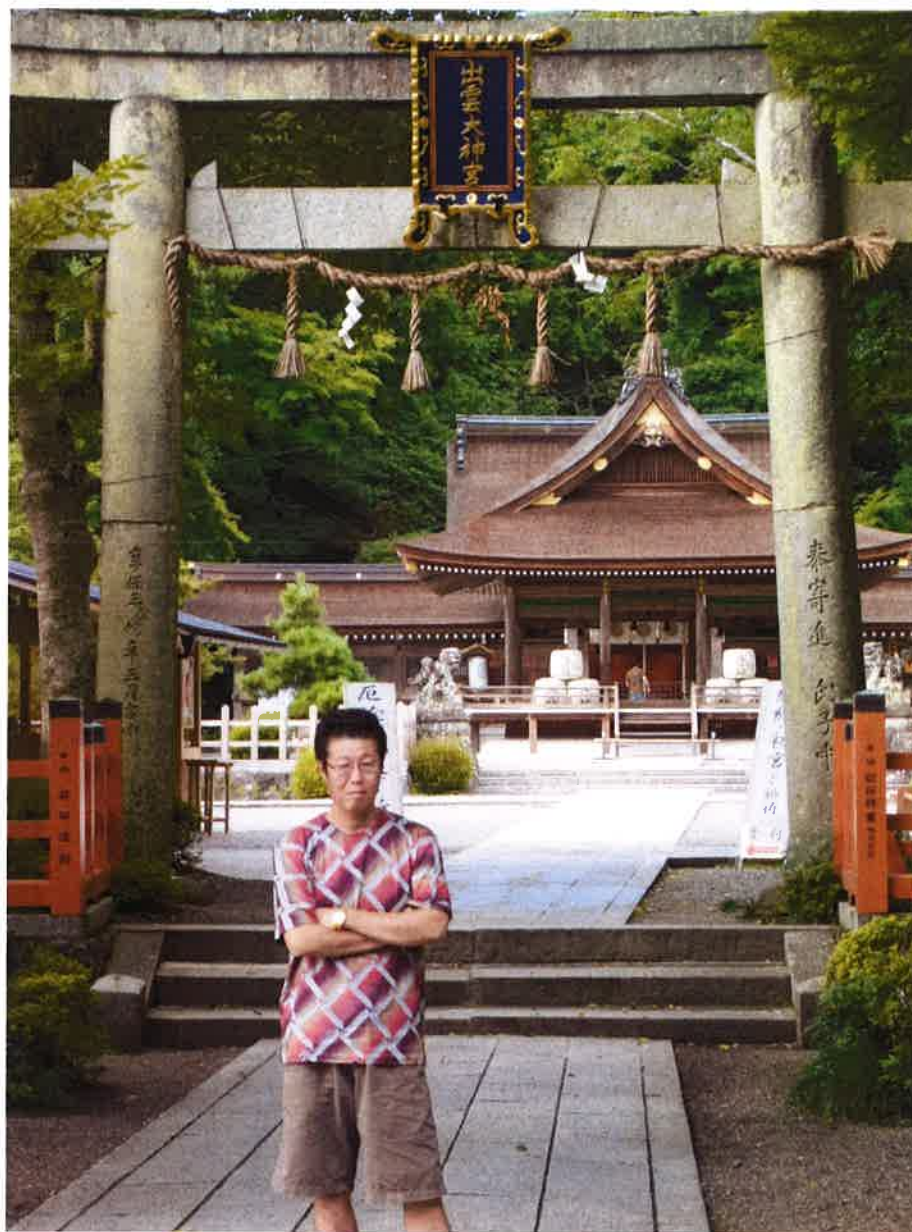
さがなし【性無し】

- ① 意地が悪い
- ② いたづらだ・やんちゃだ

いたづらなり【徒らなり】

- ① 無駄である・役に立たない
- ② むなし
- ③ 暇である







吉田兼好 徒然草 第236段

丹波に出雲といふ所あり。大はを種して。めでたく造りし。たのなにかしかな。知る所
なれば。杖のこゝろ。聖澤上人。そのほか。人もまた。種ひて。いふ。たまたま。出雲。兼好。た
いも。ちひ。召と。せん。と。て。真し。も。す。い。ま。る。に。おの。おの。種ひて。ゆゆしく。種を。こ。した。り
御前なる。鴨子。狛犬。昔。も。て。後。ろ。ま。ま。に。立。た。り。け。れ。ば。上。人。い。ま。じ。て。あ。り。て。お。お。め。さ
たや。この。御子の。立ち。や。いと。り。づ。ら。し。深。き。杖。あ。ら。ん。と。云。す。す。い。か。に。は。は。は。
藤。藤。の。こ。と。は。御。見。じ。と。が。め。す。や。む。け。な。り。と。云。へ。ば。杖。の。お。の。種。ひ。て。ま。ま。こ。こ。に。は。
真。なり。けり。那。の。つ。と。に。種。ら。ん。と。云。す。か。に。上。人。な。は。み。か。し。各。り。中。お。た。ら。ん。と。し。種。ら。ん。
べき。種。した。る。神。宮。を。呼。び。す。この。御。は。の。鴨。子。の。立。た。れ。や。定。め。て。ま。り。あ。る。こ。と。に。は。へ
らん。ち。と。承。ら。ば。ね。と。云。は。れ。け。れ。ば。い。ま。の。こ。と。に。種。ら。ん。と。云。す。か。に。上。人。な。は。み。か。し。各。り。中。お。た。ら。ん。
つり。ける。香。煙。に。種。ふ。こ。と。り。と。云。す。か。し。香。煙。に。種。ふ。こ。と。り。と。云。す。か。し。香。煙。に。種。ふ。こ。と。り。と。云。す。
な。づ。ら。に。種。ら。ん。に。けり。





丹波（京都にある地名、一部、兵庫県にまたぐ）に出雲（島根県）という国がある。（そこにある神社は出雲の国の）出雲大社の神を分け移してすばらしくつくっている。（↓ようするに簡単に言ってしまうえば、丹波にも出雲大社があるといいたい訳だよ）。志田（太）のだれそれとかや（言う人が）領有している（||所有している）土地であるので、（この主語は、気をつけよう！ 志田のだれそれとかや言う人が）秋の頃、聖海上人や（「が」ではないぞ！）その他の人も人をたくさん誘って、「さあ、いらっしゃい、出雲を拝みに。ぼた餅を召し上がらせよう（||ごちそうしましよう）」と（言っ）て、（志田のだれそれとかや言う人が、みんなを出雲まで）連れて行ったところ、みんなは拜んで、たいそう深く信仰心をおこした。神殿の御前にある（||置かれてる）獅子・狛犬が背中を向けて後ろ向きに立っていたので、上人はたいそう感動して、「ああ、すばらしいよ。この獅子の立ち方は、たいそう珍しい。深いわけがあるのだろう」と涙ぐんで、「なんと皆さん方、すばらしいことはご覧になって気にとめませんか。まったくひどい（または、情けない）」と（言っ）て（または、言うと）、みんなは不思議がって「本当に他と違いますなあ」「都へのみやげ話に話そう」などと（言っ）て、上人はさらに（その由来を）知りたがって、年輩で（または、年をとって）物事をきくと知っていきそうな顔をしている神官を呼んで、「このお社（||神社）の獅子の立てられ方は、きつといわれがあること（||）でございましょう。ちよっとうけたまわりたい（||お聞きしたい）」とおっしゃったところ、（神官が、こう言うんだ）「そのこと（||）でございませう。いたずらな子どもたちがいたしましたこと（||しでかしたこと）。けしからんことである」と（言っ）て、（獅子・狛犬に）さし寄って、据えなおして（||近づいて、置きなおして）行っ

まったので、上人の感動の涙は無駄になってしまった。